

シャボン玉の歌に表現された親の愛

しゃぼん玉飛んだ
屋根まで飛んだ
屋根まで飛んで
こわれて消えた

しゃぼん玉消えた
飛ばずに消えた
生まれてすぐに
こわれて消えた

風、風、吹くな
しゃぼん玉 飛ばそ

私はこの歌はごく平凡なしゃぼん玉を飛ばしている情景だと思っていたが、そうではなかった。子どもに対する父の思いを表現した歌だったのだ。

野口雨情という童謡作家がいる。
雨情はなかなか子宝が授からなかった。
半ば諦めかけているとき、女の子が授かった。
八年目のことだった。だからその子を目の中に入れても痛くないほどに可愛がった。

ある時、地方公演に行っている時、まだ二歳にもならない女の子が伝染病にかかって瀕死の重体になったのだ。緊急連絡でそれを知った雨情は、気も動転して雨の中を駐車場まで走った。

「何でこんなことになったのか... まだ二歳にもならないのに...。
私や家内が何の悪い事をしたというのか...。どうにか助けて欲しい...。」

ところが雨情の祈りも虚しく、待っていたのは娘さんの悲しい姿だった。
それからは毎日、浴びるように酒を飲んだ。酔って悲しみを忘れようとした。
そんなある日、その子が夢の中に現れたのだ。その子は泣いていた。涙に濡れた瞳を見た時、雨情ははっとした。

「ああ、このままでは天国に行っても娘に会わせる顔がない。お父さん、頑張るよ。
悲しみをこらえ、お前の分まで一生懸命生きたよと言えるようになろう。」

それが転機となった。「七つの子」「青い眼の人形」「十五夜お月さん」「しゃぼん玉」なども雨情がお嬢さんへの思いを託した歌だった。

コメント

誰でも知っている童謡ですが、この裏にあるストーリー(物語)を知っている人は多くありません。
野口雨情がどんな気持ちでこの歌詞を書いたのか？
彼の心が、感情が、想いが伝わりますね。
そう思って、改めてこの童謡を歌うと涙が出ますね。

ただ単に良い歌だな！と思うのと
こんな想い(念い)があって書いた詩、なんだと知ってからの違いはどうでしょうか？
21世紀のマーケティングはストーリー性(物語性)が重要な鍵と言われております。
こんなところにもビジネスのヒントがあると感じます。
皆様は、いかが感じましたか？